こいぶみ

pinokopapa

目次

あなたへ 1
娶る筈だったあなたへ 4
愛おしい日々 6

あなたへ

呆気ない一生でした。
世の片隅にそっと生きて、
ほんの短い、夢のような人生でした。
そんな瞬きほどの短い一生のうちで、私はあなたを

千年

恋しました。
私はあなたに初恋し、
その時々のあなたに出会い、
そのたびに何度も何度も

初恋

をしました。
あなたは永遠の美少女。
私は心を震わせて
あなたを見ているだけでした。
私はあなたにふさわしくない

鼻のシラノ

でした。
あなたを思っているだけの鼻のシラノ。
私は最後に思いを秘めてあなたに会いにいきました。
そしてそっとあなたを抱きしめた。
私の恋はそれですべてでした。
美しくすかれた黒髪とルージュ。
美しく装ったあなたに

私は初めて恋する少年のように
胸をときめかせました。
不意に、1111

ハグさせて

と口を突いて言葉が出ました。
そして、なんて大胆なんでしょう、
私は心を震わせ、思い惑いながら
近寄り、肩を抱いたのです。
黒髪がさらさらと頬に触り、
あなたの肩が固くなっていた。
このまま
　　百年

抱いていたかったけれど、
ありがとうと私は離れた。
そして帰ろうとすると、あなたの唇から
取り止めもない言葉が出てくる。
なぜかわからなかったけれど言葉を繋ぎ、
私は帰らなくてはと背を向ける。
その時私の中で何かが動いた。
不意に振り向いて、私はもう一度あなたを奪うように抱きしめた。
認めたくないが、それはリピドーだったかもしれません。
もう私の恋は完成したと言うのに。
私は清純なあなたをけがしはしない。
そして千年恋して、抱きしめたこの一瞬を
私はけがさない。
あなたを恋し続けます。あなたは美しい。

娶る筈だったあなたへ

不意の電話だったと思う。しかし、あなたが電話に出てくれて幸いだった。でなければ無言で電話を切るか、間違えましたで受話器を置くつもりだった。あの時のままの声が聞こえる。明瞭で、落ち着いていて、誰の言葉も受け入れてくれる、あの時のままの声だ。いや、誰の言葉もではなくて、私の話のじっと聞いてくれた声だ。いちどきにすべてがよみがえってくる。あの人が私のそばに座っている。いつもそうであったように。あの時、どうして私はこの人を抱きしめなかったのか。そうすれば、私はこの人をうしなわなかった。

若かった、子供だった、そんな言い訳はいくらでもある。この人に愛されていると確信出来てなかったというのもある。だが、振り返ってみれば、いつでも私について歩き、話し、笑っていたことだけでわかるじゃないか、この若造は。昔の私をこう叱り飛ばしてやりたい。私はこの人に何も言わなかった。好きだとか、愛してるとかの月並みな言葉だけじゃなく、手も握らなかった。告る？ なんだ、それ！ 私たちの時代は、そんなもんじゃなかったんだ。女性は美しく優しく、言葉を交わさなくとも一緒に歩いているだけで分かり合えるものなんだと思っていた。しかし、そう思っていたのは、私だけだったのかもしれない。そんなことに気付くのが遅すぎた。世間知らずのお坊ちゃんは、この人の想いに気付かず、それでいて自分はもうこの人の婚約者だと思い込んでいた。二人はそう思っていると思ったのだ。だから、私はこの人の前で、いかに自分があなたに相応しい人間かを誇って見せたり、精一杯背伸びしてみたりを繰り返した。この人の御岳父というお方が偉すぎた。だからこの人を軽々に扱ってはいけないという思いがあった。この人のお父様の名前が昭和史のどこかに刻まれているのだ。私ごとき、砂粒にも足らない。だから、手も握れなかった。

二人とも大学へ行くこととなり、故郷を離れた。この人は京都に行った。私たちは京都で

それから何年か、大学が荒れた。全共闘世代とは我々のことだ。しかし、休校になった大学

朝早くから京都駅の2階の食堂は開いており、腹ペコの腹を満たすことはできた。別に京都

こうして故郷にいるあの人と話していながら、この人は京都にいる、そんな気がしてならな

私はあなたに何もしてあげていない。 \newline

だが、それから先へは踏み出せなかった。会いたい。そうはいえなかった。沈黙があった。また今度ね。そんな答えが返ってきた。夜空にとてつもない悔いと悲しみが彷徨う。もう取り返しの付かない悲しみだった。

この人が私の前に現れた時は、印象が薄かった。いつも静かで、半歩後ろに下がって目立た

中学生の時、私は谷崎潤一郎の洗礼を受けた。刺青、春琴抄を読み、以来、文学全集に納め

そして、大学闘争。石を投げ、あの京大の助教授の講演会をこの大学で開き、革命をなそう

だが、私は予定調和のように信じていた。私がここにいれば、いつかこの人と出会えて、そ

谷崎は、「恋愛は芸術である。血と肉を以て作られる最高の芸術である」というが、そうた

愛おしい日々

この子は何故私にそんなことを聞いてきたのか、わからなかった。虎落とか虎落笛ってどんな意味ですか？ この子の後ろで、頬のこけた男がビクッと顔を上げる。二人とも国文学を専攻する学生だ。ところが私は法学部だ。俳句の季語にもあるよね、と答えてしまった。横の男が私を睨みつける。その一瞥だけで彼がこの子に好意を持っていることが察せられた。詳しいことは彼に聞けば、と言ってやっても良かったが、急に対抗心が巻き起こった。虎落と書いてもがりと読むわけだが、実は諸説あって、よくわかってないらしい、と話し始めてしまった。元々は魏の時代に虎落と言ったらしいけど、その意味も解明されてなくて、日本でも万葉の時代に人が亡くなると喪屋を作り、その周りを竹垣で囲って、そこに遺体を安置して遺族が喪に服するという葬儀の形式を取ったらしく、それをもがりと言ったようなんだよね。それで、その喪屋の周りを囲った竹垣を虎落と言い、その竹垣に風が吹き付けてひゅうひゅうと鳴る音を虎落笛と言ったようなんだけど、回りくどかったけどこれでいいかな？ 頬のこけた男が、一瞬悔しそうな顔をする。へえ、じゃあ随分寂しい言葉なんですねと、この子が言う。葬儀の形式から来た言葉だから、寂しいよね。でも、物忌からくる形式で、遺族の悲しみをそっと囲っておいてあげようという意味もあるから、どうだろうね。そんな会話をしたのが、始まりだった。

大学闘争がもう学園闘争と呼ばれるようになって沈静化し、私たちも選択を迫られていたこ

ちょっと前を自転車を押しながら歩いている子がいた。声をかけてみる。振り向く顔が沈ん

そう、で、君はどうしたいの？ \newline
私は帰りたくない。仕送りを止められても帰らない。 \newline

暗い顔できっぱりと言った。
　じゃあそう言えばいい。
そんな会話をしている後ろで声がした。声はこの子の名前を呼んでいた。そこにこの子の両親が旅行鞄を持って立っていた。私はちょっと首がすくんだ。あまり関わりたくないシチュエーションだ。だが、この子は私の袖を掴んでいた。私はそれにも驚いてその手を見た。
　ご両親？
そう聞くと、顔をこわばらせて頷く。
　あっ、すみません、かなこさんの友人で、由紀と申します。
そう言っている横をお父さんが黙って通り抜け、先へ行ってしまった。

　かな子、いきましょ
お母さんが言う。
　じゃ、僕は、
と言うと、この子が小さな声で、お願い、と言った。後ろでお母さんがなぜか微笑んでいる。ひっ返せなかった。じゃ、と自転車は私が引き受けた。
　この子の下宿はすぐ近くだったので、そう時間はかからなかった。その間、この子がじっと俯いて何かを固く思っているのが分かった。私がこの子の下宿を訪ねるのは初めてで、どこへ自転車を止めればいいのか、どこから入っていけばいいのか、迷ってしまった。ここと、この子が指さす所へ自転車を止め、暗い廊下をついてゆく。お父さんはもうドアの前で立っていた。私を睨む。かよ子がドアを開けると、
　君は帰りなさい。
と怒号のような声が響いた。そりゃそうだ。私は部外者だ。ところが、かよ子が
　待って、この人も一緒に話させて。
と言う。
　いいじゃない。一緒に話し合いましょうよ。
いやいや私は部外者だとそう思うさなか、お母さんがそう言い、手で、さあどうぞと促す。かよ子が目で、お願い、と見つめてくる。私は引っ張り込まれた。
　君は誰だね。
お父さんが言う。
　友人です。
　ヘルメットを被った過激派かね。そうですと言いたかったが、
　普通の学生です。
と無難な答え方をした。
　で、この子とはどういう関係なんだね。
問い詰められる。しらばっくれたい思いだったが、本当に友人関係だったのだから、もう一度、
　友人です。
と答えた。お父さんは腕組みをし、
　本当は、この子とだけ話をしたかったのだが、娘があんたを頼りにしているみたいだから率直に言おう。先日、弘安警察が私の元に来て、娘のことを根掘り葉掘り聞いてきた。高校時代はどんな思想を持っていたのか、過激派との接触はなかったかとね。私も一応府会議員を務めさせてもらっているから、政治理念は一応持ってはいるが、昨今の過激思想には賛同できない。娘も一緒だと思っている。暴力革命はダメだ。ましてや公安警察に目をつけられるような躾をした覚えはないと追い返してやった。だが、デモの写真に娘が写っていたらしいので、家に連れて帰ってじっくり話を聞こうと思ってね。そんなデモに参加するぐらいなら、大学へやらせておくことはできない。私の秘書でもさせて勉強させた方がマシだ。
と私に向かって一気に捲し立てた。なんで私に言うのだろうと思いながら聞いていたのだが、いや！ とかな子さんが隣りで言う。以前、この子のお父さんは労働組合の書記をしていて、労働争議の際は強硬な交渉を行ない、剛腕で知られていたらしい。それがあっ

て革新系の府会議員を務めるようになったと聞いていた。
　デモなら、私も参加したことがありますよ。だからと言ってすぐに過激派には結びつかないと思います。わたしだってどこかのセクトの人間じゃありませんが、この沸騰した状況じゃ、普通の学生でもデモぐらいには参加することもあります。それに、
と、私はお父さんに殺し文句を吐くことにした。
　かな子さんはお父さんの背中を見て育っていますから、今の腐敗した政治を追求するお父さんの正義感を受け継いで、同じ思いでデモにも参加してんだと思いますよ。かよ子さんはお父さんを尊敬していますから。
ウッと唸って、お父さんは言葉に詰まった。
　そうよ、だから言ったじゃない。
とお母さんが続ける
　それに、こんなしっかりした人がついててくれてるんだから、大丈夫よ。
お父さんが私に尋ねた。
　学部は？
法学部です。
そうか。
法学部なら潰しが効くからいいね。
何か、私が面接を受けている雰囲気だった。
　いや、法学部といっても、私は経済社会史と憲法について勉強していて、ちょっと浮世離れしているんです。それに比べて、かよ子さんの学識は凄いです。本当によく勉強されていて、例えば清少納言ですが、高校の時、古文の先生だって、普通にセイショウ、ナゴンと呼びますが、かよ子さんはちゃあんと、セイ、ショウナゴンと言います。これが本当の呼び方なんですよね。ここまで分かっているなんてすごいと思いますよ。
と捲し立てた。
　この人は本当によく勉強してます。そのことは、僕が保証します。
　そうかね。
そうですよ、お父さん。自分の娘を信じましょ。
お母さんが続ける。
　こんな人が付いてるんですから、大丈夫。
ちょっと待って、どうして？ と、戸惑うだけだった。
　とにかく、娘さんとよく話し合ってください。僕は失礼しますから。
そう言って私は立ち上がった。
　ありがとうございました。
と、お母さんが言ってくれた。解放された！ とほっとして、部屋を出た。かよ子も付いて出てきて、頭を下げ、小声で、迷惑だったでしょと言った。私は二、三度首を振り、軽く挨拶して帰った。
　結局彼女は一週間ほど家に帰っていたらしい。学校の図書館に行くと、そこで出くわした。ちょっと待っててと言い、本を返却して彼女の方に向かった。
　どうしてたの？
と聞く前に、顔が曇った。

父がどうしても帰れというの。口には出さないけど、どうも由紀さんのことを誤解してるみたい。
そうか・・・。困ったなあ。
困ってる？
困ってる！
彼女がふっと笑った。
ご飯、食べに行こう。
二人で学生会館の学食を食べに向かう。途中で、家に帰らされて母の監視のもと、家事手伝いをさせられ、父の鞄持ちもしたことなどを話してくれた。
そっか。でももう学校も正常化されてきたし、勉強する！ って言えば帰れるんじゃない？
そうなの。私、そう言って帰ってきた。
今日、今から予定ある？
部屋の片付けぐらいかな。
じゃ学食はやめて、街に繰り出そう。僕が奢る。バイト代が入ったから大丈夫。
彼女が笑った。私たちは街を横切る大きな川の袂の森永直営店に向かった。その店の床は板張りで、昔の西部劇映画のように硬い足音が盛大に響いてちょっと苦手だったが、それでも店自体は好きだった。そしてこの店の橋を挟んで向かい側には小さなレコード屋さんがあり、二、三枚だが、マイルスデイビスやビル・エバンスのレコードも買ったりしていた。そんな話を彼女としながら、ちょっと奢ったランチを食べ、食後にケーキとコーヒーを飲んでホッとしていると、この先の公園へ行こうという。いいよ、と立って、私たちはそちらに向かった。
少し暗い空になっていた。かよ子が回転遊具に腰掛けた。私がそれを少し早めに回すと、かよ子が怖がる。私は勢いをつけて回転遊具に飛び乗った。かよ子が暗い顔になっていた。
由紀さん、お願いがあるんだけど。
何？
私の友達で、とっても真面目な子なんだけど、一生懸命バイトをして学費と生活費を稼いでる子がいて、女の子なのに女の子らしい楽しみなんかと無縁な生活をしてる子がいるの。一度、その子とデートしてあげてくれないかしら。変な意味じゃなくて、由紀さんならその子に優しくしてあげれるのじゃないかと思うの。
ふん、じゃあ僕はやすらぎの森へのエスコート役ってこと？ それだけでいいなら、かよ子さ
もう回転遊具は止まっていた。なにか突拍子もない申し出だが、私は簡単に考えて引き受けてしまった。
下宿の電話にかよ子さんから電話が入った。何月何日、何時からなら、彼女、バイトの終わりに時間ができたと言ってたから、お願いします、とのことだった。そんなに働いてるの？、わかりました、と返事した。場所も聞いた。初めての人だから、服装と目印も確かめた。そして少しだけど、軍資金も用意した。私だって初対面の人とデートするなんて初めてだし、緊張もした。その日になって後悔もした。かよ子に会って、あなた

も一緒に来るようにと頼もうかとも思った。だが、それも不甲斐ないと思い返して、初デートの場所に向かった。約束の場所には30分前に着いてしまった。そこは地方都市のデパートの入り口だった。ただもうきまり悪くて、壁に持たれて俯いていた。その私の前に、息を切らせて飾り気のない質素な服装の女の子がやってきた。一目で約束の子だと分かった。彼女の方は私を見知っていたようだ。園子です、今日はよろしくお願いします、とお辞儀をしながら言った。私もそれに答え、まるでお見合いの後の初デートだと思った。

今の時間ですから、お腹が空いたでしょう。ちょっとだけ歩きましょうか。

そう言って、すぐ近くの学生が行くには少し場違いなレストランへ向かった。私が大学入学祝いに親と初めて行ったところだ。その店の前に着くと、彼女が物おじするように躊躇った。大丈夫、さっ、と手を取って中へ入った。彼女も硬くなりながら付いて入った。私はちょっと大人びた、気取ったことをしていた。予約の由紀ですと伝える。お待ち申しておりましたとウエイターが席に案内してくれた。彼女も黙って、ウエイターが引いてくれた席に座る。一度に緊張してしまったようだ。お料理はご予約通りでよろしいでしょうか。はい。そんな会話をじっと見ている。

ごめんね。もう料理は予約していたんだ。口に合わないかもしれないけど、僕の予算で決めさせてもらった。辛抱して。

・・いえ、いいんです。

か細い声が返ってきた。

僕も頼まれた以上、あなたをやすらぎの森へいざなう執事の役目を果たさないといけないから、気にしないで。

しつじ？

そう、ナイトじゃなくて、執事。そうですよ、お嬢様。

この冗談で、やっと園子も笑った。化粧っ気のない、飾らない笑顔だった。

この後は、映画でもどう？

それでいいです。

まるで絵に描いたようなデートコースだけど、勘弁ね。

そんな会話からやっと仮免許のデートが始まった。食事中も、できるだけ言葉を選んで、身の上話とか出身地とか家族のことは聞かなかった。ただ年齢は聞いた。

そっか、僕より一つ上なんだ。

へえ、そうなんですか。すると、私の方がお姉さん。

はい、お嬢様。

この返事にコロコロ笑った。可愛い人だ。

食事中、かよ子さんって可愛い人ですよね、と彼女が言った。

待って、彼女のことは今日はタブーですよ、今日はあなたが主役なんですから。

そういうと、顔が曇る。食器が下げられ、コーヒーとデザートが来た。その時、この人は綺麗に食べる人だと気が付いた。マナーとか作法といった次元ではない。全体に、若い子には似つかわしくない上品さがあった。使っていたフォークとナイフも、和食の作法のように音を立てずに置く。この人の手元をついじっとみてしまった。

荒れているでしょ。 \newline
いや、そうじゃなくて・・・。 \newline

あと、なんて言ったらいいかわからなくなった。
　じゃあ、映画に行きましょう。
そういったものの、映画の最終回にはまだ時間があった。映画館に入ってもいいのだが、急遽私は途中のアクセサリー店に入った。そして、ろくに品定めもせず、半ば強引にネックレスを選んで、これがいい、と押し付けた。すると女性店員が、彼女さんですか、ならこれも一緒にどうですか、よく似合いますよ、と言ってくる。明日からの飯代どうしようと思いながら、買ってしまった。それをもらえませんと押し返してくるが、買ってしまったのだからと押し付ける。彼女はそれを胸に抱くように受け取った。ああ俺はどうかしてる、顔には出さないが、そう後悔した。私はこの子に同情したのだろうか。

映画は女の子に合わせてラブストーリを選んでおいた。手を取って館内の暗い階段を降りて

映画が終わった。場内が明るくなる。 \newline
すいません、私、眠ってしまったみたいで。 \newline
いいんです。僕の方こそ、なんか無理させたみたいで、申し訳なかったです。

本当にそう思った。
　こんな朴念仁でがっかりしたでしょう。
そういっても、園子さんは首を横に振るだけだった。
　この奇妙なデートも終わりかけていた。だがここで問題があった。バスがないのだ。映画館前を 10 時 15 分のバスがあるが、それが最終で、映画はそれを過ぎて終わる。私はそのことも考えていたので、自転車で来ていた。私はそのことを説明し、自転車で送ると伝えた。園子さんは躊躇っていたが、お願いしますと頭を下げた。二人でデパート前まで歩く。橋の上は風が通り、二人で歩くのが楽しかった。デパートの自転車置き場から自転車を引っ張り出し、後ろに乗るように促した。彼女は横座りに座った。私は二人乗りをしたことがなかったけれど、とにかく慎重に走った。田舎町は夜更けに人通りもない。と、二人乗りかい、焼けるねえ、と酔声が響いた。とにかく走った。そして、あっ、ここで、という園子さんの声で自転車を止め、ふうっと息を吐いた。
　下宿ってどこ？
私は彼女が指差す方まで彼女を送った。農家の庭先の離れが彼女の下宿のようだった。
　ありがとうございました。今度のことは、かよ子さんに無理を言って、私が頼んだんです。かよ子さんも何か悩んでいるみたいでしたし、・・・。
なんのことか分からない、でも、もうこれでお役目は終えたんだと思っていると、不意に、園子さんが私の首に手を回して抱きついてきた。えっ、と思ってどうしたらいいか分からなかった。そして散々迷って、そっと肩に手を回し、そっと抱きしめ返した。それしかしょうがないように思った。相当長い時間だった。園子さんが顔をあげ、体を離してきた。そして、ごめんなさい、と小さな声で謝る。

でも嬉しかったんです。ありがとうございました。かな子さんには言わないでくださいね。

そう言って立ち去ろうとする園子さんに私は声をかけた。
　すみません。僕はあなたともっと真剣に向き合うべきでした。すみませんでした。
そう言うのを聞いて、園子さんは小走りに帰って行った。私はそんなことを言って良かったのだろうか。誠意を持って対していたけれど、真剣じゃなかったと告白しているようなもんだ。ああ、やらかしたかなあ、と思いながら自転車で帰った。夜の底が抜けて星が降り注いでくるような夜道だった。
　学校にも授業にもバイトにも、全部に気が抜けて力が入らない日々を過ごしてしまった。かよ子さんからも園子さんからも連絡はなかった。私は、そりゃそうだろうと思った。しかし、かよ子さんはなぜ園子さんを私に会わせたのか、そして園子さんはなぜ私とのデートをかよ子さんに頼んだのか、朴念仁の私には見当もつかなかった。とにかく何の連絡もないし、大学でも顔を合わさない。だが、こちらから出かけてゆくのは間違っていると思った。そんなことはしちゃいけないと思い込んだ。そして、アルバイトに出かけたり、レポートに追われたりして何日か過ぎた。

その後　　背に腹は変えられず、学生課のお知らせを覗き込み、臨時のバイトがあるのを発

重労働のバイトでしたね。 \newline
なんだ、みてたのか。 \newline
見えました。しっかり。 \newline
そっか、ちょっと金欠でね。割りのいいバイトだったから応募したんだ。 \newline
そうですね。金欠ですね。 \newline

とニコニコ笑う。
　かよちゃんのせいだぞ。
そんなことないです。由紀さんのせいです！
そうだね、自業自得だ。
自業自得！
そう言い返して笑う。私の悪戯を見つけて得意になっているように思えた。ちょっと首がすくむ。それを誤魔化すように、じゃ、ご飯に行くか？ バイト代もたんまり入ったし、と行ってしまった。はい、奢ってください、とニコニコして言う。

こいぶみ

著　　pinokopapa

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社